

日本における新時期文学翻訳の黎明期と黄金期

孫 若聖
(東華大学)

The Chinese literature (in this paper, novel) written between 1976 and 1989 is termed, in academia, as “China’s New-period Literature”. According to statistics, no less than 659 pieces of China’s new-period literature were translated and published in Japan, among which 108 pieces were published between 1978 and 1986 while 412 pieces were published in later years between 1987 and 1995. Hence, these two periods of time are referred to as the early and golden ages of the translation of China’s new-period literature in Japan.

In this paper, the paradigm of DTS (Descriptive Translation Studies) is adopted to analyze the differences in the translated versions’ publication forms and translators’ professions between these two periods of time. The conclusion of this analysis will contribute to revealing and clarifying the relationship between the translation of China’s new-period literature and the social context in Japan.

1. はじめに

日中両国の文化・文学の交流は長きに渡り行われてきた。1976年の文化大革命（以下、文革）の終焉とともに、10年間死滅していた中国の同時代文学が蘇生した。研究界は、1976年頃から1980年代末までの中国大陸の作家によって書かれた小説を「新時期小説」と命名した。新時期小説は出版されるやいなや日本側の有識者から注目され、1980～90年代の日中友好の歴史的文脈の中で、中国社会を理解するための社会学の材料や文芸鑑賞の道具として数多くが翻訳された。これらの訳文（以下「TT」）は日中両国の文学交流において重大な意味を持っているが、その相関研究は未だに十分に展開されていない。筆者はTouy（1995）が提起した記述的翻訳研究（DTS）の枠組みを援用し、翻訳を目標社会での事実と捉え、これらのTT（及びTTに関する前書き、後書、書評などのパラテキスト）を当時の日本社会に文脈化し、日本における新時期小説の翻訳状況を概観する翻訳史研究を考案した¹。本研究では、以下の2つの研究目的を掲げる。まずは、新時期小説の翻訳状況を実態に即して観察することにより、全体的に

SUN RuoSheng, “The Early and Golden Ages of the Translation of China’s New-period Literature in Japan,” *Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. Pages 125-143. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

みてどのような特徴があるのかを明らかにすることである。もう一点は、それらの特徴があらわれる理由を考察することである。

新時期小説のTTは、2014年までに少なくとも659篇が日本の公開出版物として刊行されている²。このうち、1978年から1986年までの9年間では合計108篇のTTが存在している。続く1987年から1995年までの9年間では合計412篇のTTが記録されている。新時期小説の秀作の殆どがこの2つの時期に日本で紹介されている³。数量からみて、1978-1986年は新時期小説翻訳の黎明期、1987-1995年は黄金期であると考えられることは可能であろう。次節では、新時期小説の翻訳を黎明期と黄金期に分けて、それぞれの翻訳状況を説明しよう。

2. 黎明期における新時期小説の翻訳状況

洪(2007:200)によると、「文革終結後の一時期においては、作者の文学観念、材料の選択方式と芸術手法は『文革文学』⁴を踏襲したものであった」。「文革文学」からの乖離は1979年以降のことであるが、「当然ながら、1979年以前にもこのような『乖離』を予示する作品が登場」⁵している。

『傷痕』、『クラス担任』など「乖離」を予示する作品こそ、日本人翻訳者の視野に入り、新時期小説の日本語訳の濫觴になった。1978年から、当時島根大学助教授・西脇隆夫と日中友好協会常任理事を務めていた工藤静子はそれぞれ「志木強」、「真山下」のペンネームで、「日中友好新聞」で翻訳作業を始め、当時の中国の主流的文学思潮「傷痕文学」⁶の代表作の一部を翻訳した。1980年、2人はそれまでの訳文を集めた、『傷痕』を刊行した。西脇と工藤が新時期小説の翻訳に取り組むのと同じ時期、もう2人の日本人訳者が新時期小説に興味を持つようになる。1979年の夏、岩波書店編集者の田畑佐和子は北京で復活した著名な作家丁玲と知り合いになり、丁を介して中国で出版したばかりの文学雑誌『清明』を手に入れた。佐和子は雑誌に掲載された「天雲山伝奇」に惹かれ、東京通信社の北京駐在員を務めた夫の田畑光永とともに、3篇の中編小説を翻訳し、1981年に『中国告発小説集—天雲山伝奇—』の書名で出版した。ここでの告発小説というのは、前出の傷痕文学のような文革に対する告発ではなく、文革終結後の当世中国の暗部を暴露する意味である。収録された作品のうち、「天雲山伝奇」は文革以前の政治運動で受難したインテリの物語であり、「反省文学」⁷の鼻祖である。「転勤」は内陸部の町にある青年が様々なコネを使って、経済発展地域に転勤する物語を通して、文革後の下放された青年たちの窮地を描く一方、共産党行政体系の硬直化と官僚化を暴露した。「人妖の間」はルポルタージュの体裁で、中国東北地域での汚職事件を記録したものである。

上記の2冊の訳本に続き、1981年に相浦が王蒙の意識流小説『胡蝶』を翻訳した。『胡蝶』は新時期小説のうち、日本語に翻訳された最初の長編である。1983年1月、中国文壇で脚光を浴びた反省小説と改革小説の翻訳選集『現代中国短編小説選』が日本で出版された。訳者の上野廣生は「黨員幹部と人民の関係」、「若い世代と老幹部」、「愛

情小説」の3つのカテゴリーを設定して、中国人社会の人間関係（階級感情、肉親感情、愛情）の典型的状況を描写する10篇の作品を選択した。これらの作品は当時中国での人気作と話題作であり、多くは権威ある文学賞の受賞作でもある。1984年3月1日、短編小説選『ひなっ子』が出版された。『ひなっ子』は特定の文学思潮に基づく作品選ではなく、選ばれた10篇の作品のうち、中国政府公式の国家レベル文学賞の受賞作は1篇しかない。訳者の永田耕作はあとがきで、「文革期の体験」、「精神文明の高揚」、「日本とのかかわり」、「その他」という4つのカテゴリーでそれぞれ作品を選択したと述べている。ちなみに『ひなっ子』では、初めて新時期文学の少数民族作家とその作品（内モンゴル作家のマラチンフの「生き佛物語」）が日本に紹介された。

以上の作品集以外にも、日本では特定のテーマまたは女性文学の新時期小説作品集も出版された。1982年から1988年にかけて出版された6冊の『中国農村百景』作品集シリーズは、山西省の公式の文学誌『汾水』（1982年には『山西文学』に改名）の1980年から1985年にかけて掲載された一部の小説を底本にした農村題材の作品集である。一方、1985年4月に出版された『キビとゴマ』作品集は80年代の女性作家の活躍に目を向け、異なる世代に属する中国の著名女性作家5名の代表作を1篇ずつ収録した。ちなみに、『キビとゴマ』の訳者辻康吾はインタビューで、『現代中国短編小説選』でのTTはきまじめすぎるため、芥川賞を受賞した加藤幸子の協力を得て、文学として読めるようにリライトする意思を表明していた⁸。

中編、長編小説の場合、厳密な意味での「純文学」と考えられたのは、前述した『胡蝶』のほか、湛容の『人到中年』である。この小説はフラッシュバックの手法を用いて、中国の中堅インテリの生活上のジレンマをいきいきと描く作品で、日本では2人の訳者によりそれぞれ翻訳出版され、中篇小说のうち最初の再翻訳作品となった。残りの『小説 張春橋』はルポタージュ風の政治小説である。『海誓—海への誓い』の原文（以下「ST」）はシナリオであり、日本で出版したのは作者と訳者の合意による修正版である。

これまで述べてきた黎明期における新時期小説の翻訳状況は以下の表①にまとめることができる。

表①黎明期における新時期小説訳本一覧表⁹（出版時期順）

出版形態	作品名（出版年）	訳者	出版社	収録作品数	冊数
作品集	『傷痕』（1980）	工藤静子 & 西脇隆夫	日中出版	7	1
単行本	『胡蝶』（1981）	相浦泉	みすず書房	1	1
作品集	『天雲山伝奇』（1981）	田畑光永 & 田畑佐和子	亜紀書房	3	1
作品集	『中国農村百景』（1981-1988）	小林栄	亜紀書房	7.8.5.6.8.4	6

単行本	『小説 張春橋』(1982)	阿頼耶順宏 & 竹内実 & 吉田富夫	中央公論社	1	1
単行本	『海誓』(1982)	黎夏、青木俊	エイジ出版	1	1
作品集	『現代中国短編小説選』(1983)	上野廣生	亜紀書房	10	1
作品集	『ひなっ子』(1984)	永田耕作	朝陽出版	10	1
単行本	『北京の女医』(1984)	田村年起	第三文明社	1	1
単行本	『人、中年に到るや』(1984)	林芳	中央公論社	1	1
作品集	『キビとゴマ』(1985)	加籐幸子編、辻康吾訳	研文出版	5	1
合計				78 ※	16

※短編小説「兒女情」、「愛・忘れ得ぬもの」、中編小説「人、中年に到るや」はそれぞれ2つの平行テキストがあるため、日本語訳された新時期小説のSTは75篇があり、日本語のTTは78篇がある。

黎明期の108篇のTTのうち、訳本に収録され、出版されたTTは78篇である。上記の訳本以外、各雑誌に散在する新時期小説のTTも若干存在する。このうち、島根大学中国文学研究室による『中国少数民族文学』は5篇の少数民族文学のTTを収録した。また『日本と中国』や『早稲田文学』などの雑誌にも少ないながら数編のTTが見つかった。

2.1 短編小説の作品集を主流とする出版形態

一覧表をみると、黎明期に翻訳された新時期小説のTTは合計で78件あるが、そのほとんどが作品集という出版形態である。作品集にはTTが73篇収録されている。これに対し、単行本のTTは5篇しかない（このうち純文学は3篇しかない）。

新時期小説訳本の作品集、単行本はいずれもページ数300前後のものであるため、紙幅の制限で短編を選択した可能性は低い。また翻訳者へのインタビューにより、新時期小説の翻訳の際、出版社からの圧力が全くなかったことが確認できた。それゆえ、短編中編の作品を選択したのは、訳者の主体的な決定にほかならない。では、なぜ殆どの訳者が短編中編に着目したのか。取材可能な訳者にインタビューした結果は表②に示す通りである。

表②訳者に対する訳本形態と ST の選択についての調査結果

質問:なぜ短編/中編小説選集の形で中国文学を翻訳したのか。長編を翻訳する考えを持っていたのか。

訳者	回答
西脇隆夫	長編を翻訳する考えがない。限りある紙面でできるだけ多くの新時期小説を紹介したい
永田耕作	長編を翻訳する考えがない。中国文学の翻訳に関して、専門家が出さないなら私が、という気持ちだが、その後はプロにまかせる
辻康悟	当時長編小説がないと思った

「天雲山伝奇」に惹かれた田畑に加えて、訳者にとって短編の作品集という形態を選択したことは決して下しにくい決定ではなかったようである。この理由は恐らく新時期文学の特徴及び日本の当時の社会状況に繋がっている。

まず、1980年代前半期の新時期文学の2つの特徴を検討しよう。1つ目は、その時代の新時期小説で最も成功した形態は短編小説である。洪(1986:156)によると、1977年以降、小説の繁栄は短編から始まって、のちに中編にも発展して、その重要性を呈した。長編は確かに毎年数百部ほど出版されたが、読者に印象を残したものは少ない。言い換えると、長編小説の思想性と芸術性はまだ充分には進展していなかった。作家の生活観と芸術観は停滞しており、長編小説の繁栄期はまだ来ていなかった。当時の観点からみた新時期小説の宿命的目標は、五・四文学¹⁰が目指した目標を背負い、国民を階級闘争及び個人に対する崇拜のイデオロギーから目覚めさせ、ヒューマニズムを意識させる啓蒙にあったという。曹(1988/2010:27)によると、70年代末に、文学は人の価値について呼びかけを始める。80年代の初頭から、文学は個性の解放を喚起しはじめた。後者は前者より一歩先を進んだ。そのため、当時の作家は数十年間の変遷を記述する長編小説よりも、社会問題を取り扱い、生活の断面に切り込めるメスのような短編小説の方に精力を注いだ。

2つ目は、長編であれ、短編であれ、新時期小説の殆どはリアリズムのテキストであり、世界文学の潮流からみても時代遅れで、美学価値が高くないというものである。1980年代前半までの新時期小説の作家は概ね2つのグループに分けられる。1つは、かなり以前から作品を発表し、作家としての名望があったが、政治運動により執筆活動が禁止されていた者たちである。彼らの殆どは50代を過ぎており、「帰来者作家」¹¹と呼ばれている。もう1つのグループは、思春期を文革中に過ごし、紅衛兵学生運動や奥地または辺境へ下放された経験がある者たちである。彼らの殆どは30代以下で、「知識青年作家」と呼ばれている。「帰来者作家」であれ「知識青年作家」であれ、彼らはリアリズムの創作手法しか展開できていない。なぜなら、まず、これまでの中華人民共和国では「工人、農民、軍人に奉仕するリアリズム文学」を作家に要求してきたからである。20世紀西側の文学思潮は、資産階級のものとして排除されていた。作家た

ちは西側の文学思潮に関する文献に接触しにくい状況であった。また、数十年間にわたる知識人に対する政治運動に翻弄されたため、作家たちは西側の現代文学の創作手法を試す勇気を持っていなかった。その結果、彼らの作品はもっぱらリアリズムに基づく小説になった。彼らの作品が中国で人気を博した最も大きな要因は、作品の芸術性よりも社会関与度にある。孟 (1998: 152) によると、「度重なる社会問題に直面する文学者たちは芸術表現と文章形式の問題を考える暇がない、芸術上の創造を棚上げにして、伝統的な言語システムを通して伝統的な社会問題を取り扱う。その結果、文学の機能は単一化され、文学作品が人気になったいかなる原因も、文学作品の文学性以外の要素に帰結できた ... (中略) ... これは時代の必然である」。

さらに、長い中編または長編小説の執筆には時間と技術が必要である。文学雑誌に短編を載せるという掲載形式とは異なり、長めの中篇または長編小説は単行本の出版が必要である。長編小説の創作周期と出版周期は短編より時間を必要とするものである。おまけに、当時日中両国の各種交流の経路が完備していなかったため、日本で入手可能な中国の文芸誌には限りがあった。それゆえに、80年代前期に日本人訳者たちは長編小説との接触機会が少なかったのである。仮に接触しても翻訳と出版の交渉には時間がかかるので1980年代中前期に長編小説の訳本を出すことは困難であった。まとめると、日本人訳者が接触できる1980年代前期までの新時期小説の殆どは、社会問題を取り扱うリアリズムのテキストであった。このうち短編の価値が最も高かった。

一方、当時の日本の社会状況も訳者の選択に影響を与える。1970年代から、日本の同時代文学は次第に「脱社会化」の道に走った。1980年代、日本社会におけるサブカルチャーの登場と定着によって、日本文学史は「両村上以降」の時代に入った。両村上のうち、村上龍は主に経済高速成長期における若者たちの、人生目標なきヒッピー的な生活を描写する。村上春樹は主に現代都市にいる人々の孤独な個人感情を描く。両村上が主流になった80年代の日本文学界は内面化する傾向が一層強くなり、文学と社会の関係より個人の生活と欲望を描写する文学作品が流行っていた。すなわち、文学が社会に積極的に介入すべきかどうかをめぐって、日中両国の主流の文学思潮が対立していた時期であったのだ。1970年代以降の日本文学に馴染む日本人読者は新時期小説を読む際、共感を持ちにくかったであろう。

しかしながら、以下に挙げる2つの理由で新時期小説は日本国内において一定の読者を獲得した。1つは、中国の吸引力である。日中両国の間に経済・文化などの交流は長期にわたり行われてきた。戦争など極端な両国関係においても交流が完全に途切れることはなかった。しかしながら、1980年代前の10数年間、中国はメガホン外交の政策および鎖国政策によって、日本との各種交流をほとんど中断してしまった。そのため1980年代初期において、長い間閉鎖されていた巨大な中国の真実を知りたい日本人は大勢いた。さらに、中国が資本主義の世界市場に参入するに伴い、ODAの円借款、日本企業の中国進出など、日中両国の経済協力と経済交流は次第に活発化していった。それゆえ、中国各地の風習、中国人の国民性、共産党の政策と中国人の日常生活との

関係など、中国に関するあらゆる情報は将来性のある経済利益に繋がっていると考えられた。

もう1つの理由は、日本国民の「日中友好」意識である。1980年代東西陣営の緊張緩和や冷戦構造の不安定化などの国際背景、長期にわたる日本民間の対中外交政策への反動と相まって、1978年10月に日中平和条約を調印した日中両国はやがて「ハネムーン」時期に入った。日本内閣府が行った「外交に関する世論調査」¹²によると、中国に対して「親しみを感じる」日本人（の割合）は、国交が回復した1978年の62.1%から、1980年には最高の78.6%に達した（参考として2013年は3.9%）。このような時代背景は、一部の日本人の中国同時代小説翻訳に対する熱意を喚起させると同時に、新時期小説の潜在的な読者群と市場をもつくり出した。

上述の日本の社会文化状況の文脈において、訳者は「不特定多数」の潜在的な読者の需要を鑑み、新時期小説を中国と中国人を知る窓口にする。数多くの訳後記において、訳者は翻訳を通じて中国人の日常生活を理解できると主張する。それゆえ、訳者が新時期小説のSTを選択する際、生活の様々な面を描写する短編小説を紹介することが、最も良いストラテジーとなったのであろう。ただし、このうち一部の中編長編小説は、後にその文学上の価値が次第に認識されて、日本で翻訳された例もある。例えば1981年に初版された古華の長編小説『芙蓉鎮』も1983年に初版された陸文夫の『美食家』も、後の1987年になってから翻訳された。

2.2 黎明期における新時期小説の翻訳者状況

外国文学翻訳の主力は一般的に当該領域の研究者と思われるだろう。しかしながら、黎明期の新時期小説翻訳のもう1つの目立った特徴は「翻訳者の本業の多元性」である。訳本出版の時期順にそって訳者たちの職業に簡単に触れよう。

『傷痕』の訳者の工藤静子は30年間にわたって中国で生活した経験がある。翻訳当時、日中友好協会の常任理事を務める一方、日本民主主義文学同盟員でもあった。もう1人の訳者西脇隆夫は島根大学の助教授で、「文革以後の詩的状況」、「中国の少数民族文学」などの論文/著書を出版している。『傷痕』は西脇のこれまでの新時期小説に関する唯一の成果である。『胡蝶』の訳者相浦泉は当時大阪外国語大学の中国語専攻の教授であり、中国研究界でカリスマ性を持つ人物であった。『天雲山伝奇』の訳者のうち、田畑光永はTBSの北京駐在員であった。『天雲山伝奇』以外にも、彼には『中国の冬—私が生きた文革の日々』（1984、サイマル出版会）、『宋王朝 中国の富と権力を支配した一族の物語』（1986、サイマル出版会）など、中国の政治を反映する訳書がある。田畑佐和子は岩波書店の編集者として雑誌『思想』や、岩波中国語辞典、岩波日中辞典などの編纂に携わった。岩波書店退社後、彼女は大学などで中国語・中国文学を講ずる傍ら、現代中国文学の翻訳に専念した。6冊の『中国農村百景』を翻訳した小林栄は1966年より、NHK中国語ラジオ講座、テレビ講座を中心として独学で中国語を勉強してきた。翻訳当時は長野県都筑製作所に勤務していた。『小説 張春橋』の訳者阿頼

耶順宏、竹内実、吉田富夫は当時中国政治論や毛沢東研究で有名であった。竹内(1982: 423-425)はこの小説が加害者の紅衛兵の立場で書いたものであり、再出発した中国文学の中でも孤立した作品であるゆえ翻訳を決意したことを述べているが、『小説 張春橋』の性質が半ルポの政治小説で3人の研究分野に近かったことも彼らの翻訳理由となっていたのであろう。『海誓』の編訳者日下熙は文筆家であり、青木俊郎は出版社主宰である¹³。『現代中国短編小説選』の訳者上野廣生は当時伊勢工業学校に勤務しており、彼が「NHK テレビの中国語講座によって中国語の独習を始めたのは...1972年の春から」(上野1983: 342)であった。『ひなっ子』の訳者永田耕作は朝日新聞西部本社通信部で働き、1979年の春から同講座で中国語の勉強をしながら、「北九州北京放送スクーリング」という中国帰国者と共に言葉を学びあうという組織に参加した。『北京の女医』の訳者田村年起は戦前大阪外国語大学支那語学科の出身、翻訳当時は72歳の高齢で『外語文学』雑誌の同人であった。『人、中年に到るや』の訳者林芳(本名「俞馥英」)は中国出身、日本育ちの日本語・中国語バイリンガルである。翻訳当時はKDD嘱託社員を務めた。『キビとコマ』の場合、編集者の加藤幸子は5歳から11歳までを北京で過ごし、1983年に芥川賞を受賞した日本の名作家である。しかしながら、もう1人の訳者・辻康吾へのインタビューによると、彼女は中国語がわからないということだ。辻は毎日新聞の北京支局長を経て、当該作品を翻訳した当時は東京本社外信部編集委員を務めた人物である。辻(p.271)によると、彼のほか伊藤克、下河辺容子、陶純の3人も『キビとコマ』の翻訳に協力したということである¹⁴。

このように、黎明期において新時期小説の訳者の職業は多種多様である。総勢16人のうち外国語文学翻訳の主力であるはずの研究者は5人しかいない(さらにうちの3人は1冊の小説を共訳)。マスコミ関係者は3人で、その他が8人である。

中国語の教育背景からみて、訳者は3つのグループに分けられる。バイリンガルは工藤、林の2人いる。大学中国語学科の出身者(学部/研究科両方が含まれる)は西脇、相浦、田畑夫妻、辻、田村、阿頼耶、竹内、吉田の9人いる。中国語独習者は小林、永田、上野の3人いる。訳者の中国語教育背景と職業には一定の関連性が見られる。中国語学科出身者の訳者は主に大学の研究者、マスコミ関係者、出版社の編集者として、中国に関係がある仕事をしてきた。中国独習者のいずれも、中国に関係がない仕事をしてきた。また、日下熙と青木俊郎の語学勉強歴については不明である。

Tymoczko(2007: 34)によると、訳者は人間であるから、彼らのテキストに対する認知は、彼らがいる社会の歴史文脈、価値判断標準、イデオロギー、及び彼らが受けた訓練に関わる。それゆえ、1986年までの新時期小説翻訳者の「職業多元性」の原因を解明するには、訳者の翻訳動機などの内的要素と日本社会の文脈などの外的要素を連携して考察する必要がある。筆者は上記の考察を経て、3つの原因を導き出した。

1つ目の理由として、新時期小説が従来中国文学と異なるという点が挙げられよう。中国語学科出身者による訳本のパラテキスト及び彼らに対するインタビューからみて、彼らの間に、文革後に変貌した新たな中国文学を日本人に伝えるという強烈な

意図が存在する。そもそもそれらの訳者は当時ほぼ皆 40 代前後で、中国語を勉強した時代は折りしも中国の「17 年文学」¹⁵と「文革文学」時期の最中であつた。彼らが接触できた中国の同時代文学作品は、中国の文化統制機関が輸出を許した、中国革命の勝利と新しい国家建設を反映するリアリズム小説、及び革命浪漫主義と革命現実主義を結合した「三つの突出」文学しかない。それゆえ、彼らが新時期小説のような、様々な欠陥があるにもかかわらず、従来の中国小説と根本的に違う文学作品と出合った際の喜びと興奮は想像に難くないだろう。西脇はメールインタビューにおいて、「1966 年以降、日本では政治関係の本や雑誌以外には文学関係の本を手に入れることはまったくできなかった。後に「傷痕文学」あるいは「新時期」の文学とされる当時の作品が、日本の読者（研究者にも）に強い衝撃を与えたことは確かである」と書いた。田畑佐和子はインタビューで、『天雲山伝奇』に関して、「非常に強い驚きと感動を感じ、ぜひ訳したかった」と述べた。以上の 2 人の訳者の話からみて、新時期文学と「17 年文学」、「文革文学」との比較が、彼らの翻訳動機となった可能性がある。確かに新時期小説は西側の同時代小説と比べて、時代遅れに見えたにもかかわらず、研究者たちは「新時期小説は面白くなるぞ！」（高島 1981: 222）と驚嘆した。このような比較によって生じた中国文学に対する再認識が、中国語学科出身の訳者たちを新時期小説の翻訳に取り組ませた理由だろう。

2 つ目の理由は、「日中友好」の社会的文脈である。当時の日中両国の友好関係が、一般の日本人の中国同時代小説を翻訳する意欲を喚起させた。バイリンガルの工藤と林、中国独習者の永田らが新時期小説翻訳に取り組む理由は「日中友好」を呼びかけたいという意識からであつた。『海誓』の扉には「この一篇を、日中人民の大いなる友誼と、そして犠牲となつた先駆者たちへ心から捧げる……」という一文がある。小林（1984: 304）は『中国農村百景Ⅲ』で「日中友好、日中文化交流が声を大にして呼ばれています。私は今後も中国現代文学の紹介を続けていく覚悟でおりますので…」と書いている。永田（1984: 242）は自分の訳本『ひなっ子』を「文字通り日中友好の書」と評価した。『現代中国短編小説選』の訳者上野（1983: 342）は日中国交正常化の 1972 年の春から中国語の勉強を始めており、これは明らかに日中友好を促進する目的が上野にあったことを裏付けている。工藤静子は日中友好協会の常任理事を務めた。林芳は 20 年間にわたって北京に在住して、北京放送局で働き続けた。さらに『人、中年に到るや』のカバーの「寒梅図」は、中国名作家・老舍の妻が描いてくれたものである。このように一般の日本人に新時期小説の翻訳の熱意を喚起させた「日中友好」の意識は、80 年代の日中関係、及び日中両国を取り巻く国際関係に深く関わるものである。松井博光（1984: 40）は『ひなっ子』の書評で、中国語独学者の新時期小説翻訳の現象に関して次のように評論した。

いわゆる専門研究者による訳書の刊行が長らくとぼしい状態が続いている今日、従来の読者群とはやや異なつた読者層、それも各地に散在する形で隠れている読者層が

存在していて、その数はそれほど多くないかもしれないが、潜在的な需要を形成しているのではないかと推測する。いいかえると、訳者自身、そのような潜在的な読者の1人に違いないだろう。

要するに中国語独習者の新時期小説への積極的関与は当時の日中友好がピークになった時代に生まれたもので、従来はなかった現象である。

3つ目の理由として、当時中国同時代文学に対する研究が不完全であった点を挙げたい。同志社大学教授・宇野木洋¹⁶の回想によると、1980年代初頭に、中国語学科と中国語研究科を開設していた大学は現在よりはるかに少ない。中国文学の研究は旧帝大を中心に行われていた。旧帝大の研究は伝統的に漢文が重視され、中国成立後の文学は文学価値の低下によって重視されなかった。そのため、新時期文学が湧き出すように現れる1980年代前期、日本では新時期小説を翻訳し、研究する学者が不足していた。こうした客観的事実が、非学者型の新時期小説の訳者に活躍の舞台を提供することになった。

3. 黄金期における新時期小説の翻訳状況

1987年から1995年までは日本における中国新時期小説翻訳の「黄金期」である。TTの量も訳者の数も黎明期より大幅に増加したため、すべてのTTを表で示すことができなくなった。そこで本節ではこの時期の新時期小説翻訳の概観のみを説明する。

3.1 出版形態の多様化および訳者の本業の単一化

1987年以降、訳本の数量は黎明期の年間1-2冊から10数冊までに増加してきた。内訳からみて、新時期小説翻訳の専門誌の創刊と大規模な訳本シリーズの出版が非常に目立っている。松井(1988: 39)が指摘したように、「『文革』以降、翻訳が散発的にしか刊行されなかった事態が、ここに来てようやく改善されそうな気運が生じてきたと言えるように思う」という状況であった。

翻訳専門誌については、1987年の春、竹内好の教えを直接受けた8人の中国文学研究者が『季刊 中国現代小説』(以下『季刊』と略称)を発足させた。『季刊』は2期まで発行された。第1期は1987年春から1996年2月にわたって計36号が発行され、その間に164篇の小説テキストが翻訳紹介された。このうちの大部分は新時期小説である。

大規模なシリーズ作品については、1987年以降、4つの新時期小説シリーズが出版された。出版時期順にそれぞれを紹介する。1番目の『80年代中国女流文学選』(全5冊)は25篇の中国女流作家の短・中編小説、加えて3つの資料文献を収録した。1巻ごとに1つのテーマを設定し、このテーマに関わる文学作品を収録した(表③参照)。『80年代中国女流文学選』の翻訳団体は現代中国文学翻訳研究会という、非常勤講師、定年退職者、図書館職員、家庭主婦4人の中国文学愛好者からなる同人グループであ

る。翻訳目的に関して、リーダーの南條（1986: 6-12）は1986年1月28日の朝日新聞夕刊に掲載された「女流作家の活躍が著しい中国文学界」という記事を引用しながら、「こうした新しい動向に注目し、『80年代中国女流文学選』を刊行することにした」、「翻訳を通して、現代化のもとで発展していく中国の社会と人間を理解する一助に資する」と説明した。

表③『80年代中国女流文学選』出版情報一覧表

巻数	テーマ	書名	出版年
1	愛	錯、錯、錯！	1986
2	文革	終着駅	1987
3	若者	ラブレター	1987
4	働く女	四人の四十女	1988
5	世相	六月の話題	1989

2番目の『現代中国文学選集』（全12冊）は1987年から1990年にわたって出版され、当時中国文壇でトップレベルの作家11名の作品を翻訳紹介したもので、規模からみて新時期小説翻訳史上最大規模のシリーズである（表④参照）。

表④『現代中国文学選集』出版情報一覧表

巻数	書名	訳者	監修	出版年
1.	王蒙：淡い灰色の瞳・他	市川宏, 牧田英二	松井博光, 野間宏	1987
2.	古華：芙蓉鎮	杉本達夫, 和田武司	松井博光, 野間宏	1987
3.	史鉄生：わが遙かなる清平湾・他	檜山久雄・ほか	松井博光, 野間宏	1987
4.	賈平凹：野山一鶏巢村の人びと・他	井口晃	松井博光, 野間宏	1987
5.	張辛欣：同じ地平に立って・他	飯塚容, 山口守	松井博光, 野間宏	1987
別巻	遇羅錦：春の童話	松井博光, 近藤直子	なし	1987
6.	赤い高粱	井口晃	松井博光, 野間宏	1989
7.	小鮑荘：他	佐伯慶子	松井博光, 野間宏	1989
8.	チャンピオン：他	立間祥介	松井博光, 野間宏	1989
9.	美食家：他	陸文夫	松井博光, 野間宏	1990

10.	王府井万華鏡：他	広野行雄, 柴内秀司	松井博光, 野間宏	1990
11.	百合の花：他	松井博光	松井博光, 野間宏	1990
12.	赤い高粱 . 続	井口晃	松井博光, 野間宏	1990

Lefevere (1982/2000: 235-248) によると、文学とは「文化や社会環境内にはめ込まれた1つのシステムである。これは人為的なシステムであり、客体（テキスト）、そしてテキストを書く人・編集者・流通者・読者から構成されるものである」。翻訳文学も文学システムの1つである。さらに、翻訳文学の文学システムは協賛者（patronage）からの影響を受けていると考えた。協賛者とはイデオロギー（特定の社会で文学システムがほかのシステムから乖離していることは許されない）、経済（訳者の生活を支える）、訳者の地位（訳者の社会的地位を保障する）の3種類があり、翻訳活動において重要な役割を果たしている。『現代中国文学選集』の場合、徳間書店の当時の社長徳間康快は、長年にわたり文化イベントの主催を通じて日中友好を提唱した人物である。彼は1977年から「中国映画祭」を始め、地味でありながらも地道に中国映画の上映機会を作った（玉腰 2014: 137）。さらに、彼が総製作総指揮を担当した、日中合作の映画『敦煌』は日本国内で大きな反響を呼び、1980年代日中両国友好関係のシンボルともされている。『現代中国文学選集』も文学界の『敦煌』のような「日中国交回復後初の大型企画」¹⁷に作り上げられた。この企画を実現するため、徳間の斡旋で長期にわたり日中友好を呼びかけてきた、大物作家・評論家野間宏が監修者を務めた。野間宏の知識背景からみて、彼が中国語 TT を監修する語学力を持っているか否かを検討する余地はあるだろう。それゆえ、野間の参与は事実上添削の作業をすることより、中国文学者以外の日本知識人も日中友好に対する関心を示していたことを意味するだろう。出版経費に関して言えば、このシリーズは徳間康快から経済的協賛を獲得でき、徳間書店により出版された。また当シリーズの編集者・訳者牧田によると、「徳間は赤字覚悟で出版したのである」¹⁸。当時日中友好の時代背景において、徳間はこの選集のイデオロギーと経済上の協賛者であることが確認できる。また、『現代中国文学選集』の作品選択は編集委員会によって決められたが、『芙蓉鎮』、『紅いコーリャン』など日本で上映された映画の原作にあたる小説がいくつか収録されていることからみて、中国の映画を日本に積極的に輸入していた徳間は協賛者として作品の選択に影響を与えた可能性が高いだろう。ただし、協賛者・監修者の特定の小説に対する見方が、『現代中国文学選集』の訳者のそれと必ずしも一致するとは限らないようである。例えば、井口は選集6と12のあとがきで「ハンセン病者に対する差別」、「下品な表現」、「たわいない民族意識」などの原因で莫言の『紅い高粱』（映画『紅いコーリャン』の原作）を強く批判した。また日本側の訳者は中国で物議を醸した女性作家・遇羅錦を翻訳しようとしたが、様々な原因でこの訳本はシリーズに組み入れられず、別巻として扱われている。この別巻に監修者野間宏の名前が記載されていない事実は、協賛者・監修者と訳者の

間に軋轢が存在していたことを物語るだろう（前掲表④を参照）¹⁹。

3番目の『発見と冒険の中国文学』シリーズ（全8冊）は1989年中国で大きな政治事件が発生した後、藤井省三・山口守・宮尾正樹をはじめとする編集者たちが企画したものである。このシリーズは20世紀中国語圏文学という発想に基づき編纂されたもので、1930年代から1980年代までの中国大陸・香港・台湾の作家の作品がそれぞれ収録されている。新時期小説にあたるものは半分の4冊である。『発見と冒険の中国文学』は「冬の時代を迎えた中国作家にわずかでも物心両面の支援を送りたい」（藤井 2013: 278）という考えから編纂されたもので、このシリーズで中国政府と民主を求める知識人間の衝突を日本人読者に伝えた。例えば、訳者の藤井はシリーズの1.『古井戸』（原作者は鄭義）の翻訳を通して中国知識人の共産党イデオロギーに対する抵抗を述べた。2.『中国の村から』（原作者は莫言）の翻訳を通して中国の農村が抱える巨大な危機を読者に伝えた。また7.『紙の上の月』（原作者、北島・史鉄生・他）において、宮尾ら訳者は1980年代新時期文学の繁栄の陰で隠蔽された、様々な原因から中国で公開出版できない「地下文学」の一部を翻訳し、日本人読者に紹介した。1989年の政治事件発生後、日本民衆の対中親近感は一時的に氷点まで下がったが、その後時間が経つにつれ徐々に緩和してきた。1992年10月の天皇の訪中及び日中国交回復20周年の結果として、日本人の中国に対する親近感がある程度回復した。その勢いによって早稲田大学の教授陣岸陽子・牧田英二・杉本達夫・田畑佐和子を中心とする訳者は「日中国交正常化二十周年にあたるが、このささやかな訳業をその記念としたい」（岸 1993: xviii）と考えて、『新しい中国文学』シリーズ（全6冊）を翻訳出版した（表⑤を参照）。この選集は中国女性の生活・職場での大活躍ぶり及び少数民族の生活を反映できる作品を重視する特徴がある。

表⑤『新しい中国文学』出版情報一覧表

巻数	書名	原作者	訳者	出版年
1.	棺を蓋いて	陳健功	岸陽子・齊藤泰治	1993
2.	琥珀色のかがり火	ウロルト	牧田英二	1993
3.	都市の困惑	崔紅一	大村益夫	1993
4.	黒駿馬	張承志	岸陽子	1994
5.	初恋	池莉	田畑佐和子	1994
6.	縛られた村	朱曉平	杉本達夫	1994

専門誌とシリーズという形態で翻訳された小説は1987年から1994年までの間に翻訳されたものの大半を占めた。評判が大きい新時期小説の大部分は上述のシリーズと『季刊』で翻訳されたが、この時期になると新時期小説または新時期小説の内容を含む

単行本の出版についても1987年以前より飛躍的に増加した。1995年までに少なくとも47冊の単行本が日本で出版された。この時期の単行本の翻訳で重要な現象は、中国俗文学の日本における登場であった。1つは、『慈禧全傳』（訳本11冊）、『新・水滸伝』（訳本1995年までに4冊、1996年1冊）などの中国の大河小説が翻訳されたことである²⁰。もう1つは王朔の作品をはじめとする、主流文学圏の自己神聖化を風刺する小説が日本に翻訳されてきた。それらの作品を通して、中国人の文学上の審美感が多元化したことが日本社会に伝えられたと言えるだろう。

専門誌、シリーズ、単行本のほか、新時期小説TTが散在する雑誌もある。このうち、1989年6月の中国政治事件への対応として、1989年10月号の『ユリイカ』には「中国文学の現在」特集を企画した。その中の「小説—現代中国文学の新鋭」のコラムに5篇の新時期小説が訳出された。それ以外にも、1960年代に創刊して現在まで定期的に発行されている、中国文学専門誌『火鍋子』は、時折新時期小説のTTを掲載した。また中国政府が協賛する日本人向けの雑誌（例えば『人民中国』）、および日本人訳者による内輪の同人誌（例えば『早稲田文学』など）でも時折新時期小説のTTが掲載された。

以上の出版物の総力によって、1987年から1995年までの時期は日本における新時期小説翻訳の黄金期といっても過言ではないだろう。新時期小説の数多くの力作がこの時期に翻訳出版された。また、黄金期に見逃された新時期小説の遺珠も現在まで翻訳され続けている。また、1987年以降も一部の民間人訳者が新時期小説を翻訳していたが、訳者全体に占める中国文学研究者の割合は黎明期より大幅に上回っていった。TTの大半を占める『季刊』及び4つの翻訳シリーズのうち、『80年代中国女流文学選』以外のすべてが研究者によって刊行された。単行本の場合も数冊以外、すべて研究者によって翻訳された。黄金期の新時期小説の翻訳の主力は当該領域の研究者であると確認できたのである。

3.2 黄金期が訪れた理由

新時期小説の翻訳状態が1987年から一変した理由は以下の3つに帰結できる。

1つ目は、新時期小説自体が大きな変化を遂げたことである。新時期小説の発展形態は、1985年を境にして2つの段階に分けられる。李（1988/1992: 68-72）によると、1978-1984の小説はリアリズムが中心とされていた。同時に、中国が鎖国の政策を廃止するや否や欧米の現代文学思想が洪水のように中国に流入してきた。新時期小説の作家たちがそれらの思想を受け止め、内面に転化した結果、1985年から欧米モダニズム文学を模する作品が大量に出版された。それらの作品は玉石混交にもかかわらず、従来の一元的なリアリズムを支配する中国文壇に大きな衝撃を与えた。宇野木（2003: 75）が指摘したように、「欧米理論の受容に基づく文学に対する見方の多様性の発見、即ち「文学観念」の変革の動きが脱文革動向を推進したのも事実だが、同時に、その多様性が一種の混沌現象を出現させたともいえる」。このような変化に日本の中国文学

研究者が興味を引き寄せられたのは当然であろう。当時日中両国間における文学作品の流通速度、及び翻訳作業から出版までかかる時間的コストを含めて考え、1985年からの中国文壇に起ったモダニズム作品が、1987年から日本で翻訳出版されたのは不思議ではない。

2つ目は、日本社会に新時期小説の訳本に対する需要が拡大したことである。学者による翻訳が少なかった1980年代中前期、日中友好の信念をもって、中国語を独学した日本民間人が新時期小説の翻訳を引き受けた事実は、日本社会において中国新時期小説の読者層が存在し、新時期文学の訳本に対する潜在的な需要を形成していたことを物語っている。1987年以降、日中両国の経済文化面交流が一層拡大するにつれて、そのような新時期小説訳本に対する需要も増大したに違いない。それゆえ、新時期小説翻訳の規模拡大は予測できる現象であったと考えられる。

3つ目は、新時期小説の研究陣が整ったことである。新時期小説の研究者の主な養成機関として、竹内好、竹内実、松枝茂夫ら名教授がかつて教鞭をとった東京都立大学中国文学研究科（以下「都立大中文研」と略称）が特筆に値する。旧帝大を中心とする日本名門大学での中国文学研究は従来「漢文重視」であった。しかしながら、都立大中文研は1950年代の創立以来、中国同時代の文学に目を向ける研究を伝統として保っていた。都立中文研の出身者たちは当初から新時期小説の翻訳に深く関わっていた。日本における新時期小説翻訳の濫觴である『傷痕』の訳者西脇及び『天雲山伝奇』の訳者田畑夫婦のいずれも都立中文研出身であった。都立大のこのような伝統は、竹内好によって創り出されたものである。竹内は知識人の独立した人格によって、彼の弟子・孫弟子の精神的支柱になった上に、彼が提起した同時代の中国文学（竹内にとっての「同時代」は五・四文学、1949年以降の中国文学を指す）を重視する「方法としてのアジア」の中国研究の視点も弟子たちによって受け継がれている。1950、60年代に竹内の教えを直接に受けた田畑佐和子、牧田英二、市川宏、岸陽子ら同人8人は中国同時代文学を精神的資源として使用し、日本人の世界を広げるという翻訳目的で1987年に『季刊』を創刊した。このほか、彼らは新時期小説の翻訳シリーズなどにも積極的に取り組んだ²¹。1980年代、都立大の中国同時代文学を研究する中堅は松井博光と井口晃であった。この時期、松井と井口は自ら現代中国文学選集など新時期小説の翻訳・研究の成果を取り上げながら、同時代中国文学の研究者（訳者）の養成にも注力した。近藤直子、飯塚容、宇野木洋、山口守、千野拓政をはじめとする両氏の弟子たちは、1987年以降の新時期小説の翻訳と研究に携わる重要な存在となり、現在でも学界で活躍している。都立大中文研の出身者以外にも、新時期小説に興味をもつ研究者が増加した。1987年以後の新時期小説の研究陣はそれ以前よりもかなり充実したといえるだろう。それらの学者は新時期小説の諸課題を扱うと同時に、翻訳にも積極的に取り組み、新時期小説翻訳の黄金期を切り開いていった。

4. まとめ

本研究は、日本における中国新時期小説の翻訳を黎明期と黄金期にわけて考察した。黎明期には、訳本は年間1、2冊のペースで出版されていた。そしてその出版形態の多くは短編小説の作品集であった。なぜなら、1980年代前期までの新時期小説の殆どは社会問題を取り扱うリアリズムのテキストであり、このうち短編の価値が最も高かったからである。また、訳者の構成は研究者、中国に関わる仕事に携わる者、中国語独学者など多様性があった。その理由は、日中友好の信念を持つ一般市民は積極的に新時期小説の翻訳に関与したからである。

黄金期においては、新時期小説自身の文学水準の向上、新時期小説に対する日本側の需要、日本における新時期小説の研究陣の充実という3つの理由で、新時期小説TTの出版形態は作品集以外、長編小説の単行本、選集シリーズ、新時期小説の翻訳専門誌など多様化を呈した。訳本は年間10冊前後までに増加した。また、訳者は大学の中国文学研究者を主とする比較的単一の構成へと収斂されていく。さらに、中国新時期小説の翻訳状況からみて、一国の文学作品の翻訳は対象国の国内状況のみならず、起点文学の水準や起点国と対象国との両国関係など、様々な社会・文化的要素から影響を受けていることが確認できた。

.....

【著者紹介】

孫 若聖 (Sun RuoSheng) 神戸大学博士 (学術)。東華大学日本語学科専任教員。研究方向は翻訳理論、翻訳史。日本における中国新時期小説の翻訳史の研究に従事。

.....

【注】

1. DTSにおける重要な概念、翻訳行為における「規範」(norms)及び「制限」(constraint)に関しては、本研究では検討しない。理由は2つある。まず、DTSにおいて規範に対する理解の硬直化は翻訳研究者からよく指摘されているからである。例えばゲンツラー(1993/2001)はトゥーリーが規範に合致するTTのみを研究対象として扱うことを指摘した。次に、日本における中国新時期小説の翻訳状況のケースにおいて、1980年代の日本社会はトゥーリーが研究した1930、40年代のヘブライ語の言語コミュニティより、文化の多元及び言論の自由に対する容認度が高かると考えられるからである。新時期小説の翻訳にあたっては特定され明白な規範または制限が存在することは考えられないだろう(本研究での考察はこれを証明した)。
2. TTリストは筆者の未刊行の博士論文『日本における中国新時期小説の翻訳とその展開—形づくられた中国の文化的イメージ—』に掲載されている。
3. 1996年から2014年年末までは139篇ほどの新時期小説のTTが翻訳された。ただし、翻訳史的な研究では、研究対象と一定の時間的距離を置いて考察する必要があると

考えたため、本研究では1996年以降の翻訳を検討しないこととする。

4. 「文革文学」とは、文革期に生まれた文学のことである。
5. 本論における引用文の日本語訳はすべて筆者によるものである。
6. 「傷痕文学」とは、名称が廬新華の小説「傷痕」から由来した、新時期文学の最初の思潮である。文化大革命の悲惨さを描くのが特徴である。
7. 「反省文学」とは、文革に対する告発のみでなく、中華人民共和国の建国以来の中国社会主義の統治メカニズムまで問い直す文学思潮である。
8. 辻康吾への電話インタビュー、2013年12月14日。
9. 表にのいる訳本以外に、柴田清伊知が翻訳した『現代中国中編小説選』がある。但し、この小説は非売品であり、公開発行したものではないため、本研究の考察対象から除外する。本の情報は国立国会図書館リンク <http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001726306-00> を参照、2013年12月1日アクセス。
10. 「五・四文学」とは、1910年代の中国で起こった新文化運動の時期に誕生した文学のことである。形式上には小説や現代詩が主とされる。現代語（白話文）が文学的言語に使用される。主題には人間性の解放が重視される。
11. 「帰来者作家」とは、1950年代にすでに文壇に出世したが、その後一連の政治運動により文革の終結までに作品を発表できなかった作家のことである。
12. 「外交に関する世論調査」、<http://survey.gov-online.go.jp/h25/h25-gaiko/2-1.html> (2016年11月18日アクセス)。
13. 編訳者後記録 (p.275) によると、株式会社大陸トラベルサービスの川崎昭二という人物も翻訳に関与した。ただし、この人物に関する資料は一切見付からない。
14. 伊藤克 (1915-1985) : 北京在住の中国文学翻訳家、中国語を日本語に翻訳する仕事に従事すると同時に、北京師範大学と北京外国語学院分院で教鞭をとった。<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/zhuanwen/200207/zhuan64.htm> (2013年10月28日アクセス)。
下河辺容子 (1962-) : 翻訳当時東京外国語大学中国語学科在学中、訳本「江青警護兵の冒険」(1984、筑摩書房)がある。
陶純は杏林大学中国語学科出身、遠藤絢と改名して杏林大学中国語学科の特任教授を務めている。http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/faculty/foreign/student/teacher/detail_2.php?id=for90001、2013年12月15日アクセス。
15. 「17年文学」とは、中華人民共和国成立後の1949年から文化大革命が開始した1966年までの17年間に生産された文学のことである。
16. 宇野木洋への対面インタビュー、2014年1月26日。
17. 近藤直子へのメールインタビュー、2013年8月8日、11月10日。
18. 牧田英二へのメールインタビュー、2015年11月28日。
19. 別巻『遇羅錦』の最後には、中国からの質疑に対処するため『遇羅錦』を別巻として刊行する経緯を説明する「おことわり」、および遇羅錦を応援する松井の「付記」

が書き加えられている。

20. 『慈禧全傳』と『新・水滸伝』以外、また高纓『孔雀の舞』(訳本全8冊、朝日ソノラマ、1995)がある。ただし、訳者が中国人の王敏であるゆえに本研究の研究対象から除外された。
21. 竹内好の精神的遺産と『季刊』創刊との関係に関しては、「方法としての中国文学—新時期小説翻訳誌『季刊 中国現代小説』』『中国研究月報』2015.6を参照。

【参考文献】

英語

- Gentzler, E. (1993/2001). *Contemporary Translation Theories. Second Revised Edition*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting, and the manipulation of literary fame*. London: Routledge.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Shanghai: Shanghai Foreign Language Education Press.
- Tymoczko, M. (2007). *Enlarging Translation, Empowering Translators*. (1 edition). Routledge.

日本語

- 上野廣生(1983)「解説」『現代中国短篇小説選』、東京：亜紀書房
- 宇野木洋(2003)「「統治」の枠組みから文化「解説」へ向けた模索の営為へ」宇野木洋&松浦恒雄編『中国20世紀文学を学ぶ人のために』、京都：世界思想社、pp.60-91.
- 宇野木洋への対面インタビュー、2014年1月26日。
- 「外交に関する世論調査」、<http://survey.gov-online.go.jp/h25/h25-gaiko/2-1.html> (2016年11月18日アクセス)
- 岸陽子「解説」陳建功『棺を蓋いて』岸陽子 & 斉藤泰治訳(1993)、東京：早稲田大学出版会
- 小林栄「はしがき」『中国農村百景Ⅲ』小林栄訳(1982)、長野：銀河書房
- 近藤直子へのメールインタビュー、2013年8月8日、11月10日。
- 高島俊男(1981)『声無き処に驚雷を聞く：「文化大革命」後の中国文学』、東京：日中出版
- 竹内実「解説」胡月偉 & 楊鑫基『小説 張春橋』阿頼耶順宏 & 吉田富夫 & 竹内実訳(1982)、東京中央公論社
- 玉腰辰己「歓迎、中野良子！」園田茂人編(2014)『日中関係史1972-2012Ⅲ社会・文化』、東京：東京大学出版会、pp.125-159.
- 辻康吾「現代中国文学によせて」『キビとゴマ：中国女流文学選』辻康吾 & 加藤幸子(1985)、東京：研文出版
- 辻康吾への電話インタビュー、2013年12月14日

永田耕作（1984）「あとがき」『最新中国短篇小説集ひなっ子』永田耕作訳、北九州：朝陽出版社

南条純子「まえがき」『錯、錯、錯!』現代中国文学翻訳研究会訳（1986）、大阪：NGS
牧田英二へのメールインタビュー、2015年11月28日

松井博光「書評 永田耕作『最新中国短篇小説集 ひなっ子』（朝陽出版社）」『中国研究月報』1984.8.25、東京：社団法人中国研究所、pp.40-41.

藤井省三「莫言一人と文学」莫言『透明な人參』藤井省三訳（2013）、東京：朝日出版社

中国語

曹文軒（1988/2010）『中国八十年代文学現象研究』、北京：北京大学出版社

洪子誠（1986）『当代中国文学的芸術問題』、北京：北京大学出版社

洪子誠（2007）『中国当代文学史修訂版』、北京：北京大学出版社

李潔非（1988）「新時期小説的兩個階段及其比較」藍棣之&李復威編（1992）『尋找的時代—新潮批評選萃』、北京：北京師範大学出版社、pp.68-84.

孟繁華（1998）『1978 激情歲月』、濟南：山東教育出版社

